

あこがれ千町

「あこがれ千町の会」ニュース No.1 2010年2月22日

連絡先 078・857・8267 (よりあい向洋)

村外総会を開催

「きまり」役員を決定

2月15日、神戸駅前のひょうごボランティアプラザで12人が参加して「あこがれ千町の会」村外会員の総会が開かれました。総会は木村民亮さんが進行役を務め、これまでの経過報告のあと、会の大まかなルールである「あこがれ千町の会のきまり」(別項)を定めました。会の代表に増田大成さんを選ぶなど、役員を選出しました。

さらに、3月中旬から約5反分(約5000㎡)の休耕田を畑にする整備作業を開始するなど、これからの事業計画を話し合いました。4月18日(日)には六甲アイランドの住民20数人がバスで千町を訪れます。準備が整えば、この日にジャガイモの植え付けなどを行って「再開墾式」を行う予定です。

資金は助成金・債券で

運営は年会費3000円

くわ、鎌(かま)、管理機(簡易な耕運機)などの農具や種、苗の購入、シカ、イノシシ除けの鉄柵などの調達に多額の資金が必要なので、兵庫県、宍粟市などからの助成金と1口1万円の債権を発行してまかなうこと、日常の運営費は年3000円の会費でまかなうことを決めました。ほかに寄付、募金などを広く訴えていくことにします。

役員は次の人たちです。(会長は千町の人たちから選出します)

| | | | | | |
|------|------|------|------|----|------|
| 代 表 | 増田大成 | 副代表 | 大谷成章 | 会計 | 安東光夫 |
| 事業担当 | 山中真弓 | 施設担当 | 湯浅允章 | 総務 | 木村民亮 |

緑とせせらぎ、「ぜいたくな土地」

フリーディスカッションでさまざまな意見が出ました。

・千町は、子育て世代にとって「ぜいたくな土地」だと思う。緑に囲まれ、せせらぎが流れ、空気がきれい。かまどでめしをたき、自分たちで作った野菜で料理する。川でそうめん流しもできる。そんな夢のような経験を子どもたちに与えたい。

・溪流沿いにカエデやサクラを植えて彩りを添えたい。20年、50年後には名所になってたくさんの人がやってくるようになっていないか。

・どんな作物を栽培すればよいかは地元の人たちの知恵を借りよう。とりあえず、夏にバーベキューをやりたいので、スイートコーン、キャベツ、サラダ菜などが必要だ。

・「自分探し」をする若者たちに来てもらいたい。そのために、安く、長期滞在できる施設を建設しよう。

当面の活動予定

神戸から千町までは車で約3時間かかるので、現地での活動は1泊2日が原則。当面の宿泊施設は上千町集会所を提供してもらえます。宿泊のための整備が必要になるかもしれません。

耕作する農地は10枚分、計約5反（約5000㎡）。無償提供してもらえます。所有者と会が契約します。水路の使用も無償ですが、みぞさらえ、草刈りなどの村の保守作業に協力します。

休憩場所、農産物加工所として耕作地のそばにある「いろりの里」を提供してもらえます。

- 1) 2月28日（日）午後2時から下千町集会所で現地打ち合わせを行います。
- 2) 3月中旬までに獣害防止工事、宿泊設備整備、耕作機械などの補助金、助成金の申請を千町の会員が行います。増田代表が県・市に応援を要請します。
- 3) 3月中旬から3月下旬にかけて耕作地の整地作業を千町の会員が行います。
- 4) 3月下旬までに耕作地に村外会員と千町の会員が堆肥（牛ふん、鶏ふんなど）を投入し、耕耘します。

堆肥は鶏糞、山の落ち葉などを「地産地消」し、村にも提供する予定です。

- 5) 3月下旬から4月上旬にかけて現地会員と村外会員が獣害防止柵を設置します。
- 6) 4月18日（日）にバスをチャーターして村外会員を招き、ジャガイモの植え付けなどを行って「再開墾式」を行う予定です。
- 7) 4月から8月にかけて、作業小屋、倉庫、休憩所、宿舍を整備していきます。

「あこがれ千町の会」のきまり

1. 目的 私たちは自然と人間、人間と人間が共生と協働の関連を強め、地域の伝統文化を継承し、発展させ、未来に向けて快適なくらしができる千町をつくる。
2. 協働 この会の会員はお互いが信頼し、尊敬しあい、活動に当たっては、内容の充実した協働の成果を得ていく。
3. 事業
 - ①農業 休耕田、放棄田を再生させ、農産物を生産する。
 - ②林業 山林の整備を進め、材木の生産・加工をする。
 - ③加工品の生産 千町の生産品を加工し、価値を高めて名産品にする。
 - ④販売 千町を生産品を販売するための組織や店舗をつくる。
 - ⑤来村者向けの環境・施設づくり
 - 1 登山道の整備
 - 2 キャンプ、野外活動の場づくり
 - 3 バンガローなどの宿泊施設
 - 4 農作業のために必要な施設
 - 5 千町のシンボリックな環境づくり
 - ・自然美の加工（カエデ、サクラなどの植樹）
 - ・農村風景の再現（水車小屋、地藏堂、一里堂など）
 - ・伝統的な遺産保存
 - ⑥伝統文化活動 若一神社では獅子舞があり、おろち退治伝説にちなんだ万灯ろうも行われる。これらの支援。
 - ⑦研究活動
 - ⑧広報活動
4. 組織
 - ①会員 会員は千町の住民と村外の人々で構成する。
 - ②役員 会には会長と役員をおき、会の運営に当たる。
 - ③総会 年1回会員の総会を開催し、会の意思決定をする。
 - ④役員会 月1回役員会を開き、日常活動について相談し、協議する。
5. 運営
 - ①活動参加 会の活動は自主参加とし、原則無償とする。ただし生産品の販売などで果実が得られる場合は公平に案分する。
 - ②協働作業と自己事業
 - 1 農場は当面共同農場とする。
 - 2 自己生産農場の希望があればそのつど協議する。
 - 3 加工、販売などの事業開発はそのつど計画・実施する。
 - ③資金・会費・募金
 - 1 事業資金は債券を発行して調達する。債権の償還は事業の果実を充てる。
 - 2 日常運営費にあてる会費は年間3000円とする。
 - 3 募金の協力を要請する。

千町に行きませんか

(あこがれ千町の会発起人の呼びかけの言葉から)

私たちは縁があって千町という小規模集落を知り、1年近く親交を深めてきました。初めて千町に行ったとき、高い山々、谷川の清流、澄みきった空気など、自然の大きさにひきつきられました。村の人たちの素朴で人なつっこい人情に、忘れかけていた日本人の原風景を見る思いがしました。やがて限界集落になるかもしれない千町は、日本の農村、農業が抱えているさまざまな問題を凝縮して持っています。

千町をとおして日本の食と農の問題を見ることができ、千町をとおして解決することが可能だと思います。

千町の放棄田を耕し、米や野菜など多種多様な農産物を生産していきます。食品加工も進めます。1000メートル級

の山々、源流の清水、この環境をフィールドに自然との接触が広がります。村の伝統文化は、私たち都市生活者が忘れ、失ったものを呼び戻します。

そんな活動を村の人たちといっしょになって進めていきます。放棄田の再生という食と農の取り組みから始まり、村人と街人とが協働して創造していく村づくり、平成の協働村づくりへと発展していく可能性を秘めています。

大自然の中に自分を置いてみるだけでも、日常と違った新鮮な体験になります。自分を見つめ直し、自分を取り戻す機会になるかもしれません。

ごいっしょしませんか。あなたの参加を心からお待ちしています。

千町 (せんちょう) というところ 宍粟 (しろう) 市一宮町の北東、国道

429号から急な坂を約6キロ登った中国山地の小さな盆地にある。千町ヶ峰(1141m)、段ヶ峰(1103m)、杉山(1088m)、笠杉山(1032m)、大段山(966m)の5つの峰に囲まれた標高600~650メートルの集落。集落の中央に揖保川支流の草木(くさぎ)川が流れている。

40年前は45軒ほどあった。現在は21戸、51人。田畑は8haあるが、放棄田が多く、現在耕作されているのは2haだけ。

岩塊流という珍しい景観がみられる。直径1~4mの岩の塊が幅15~20m、長さ600mにわたって流れるように転がっている。兵庫県で最大の岩塊流。板状節理がクジラの腹部を思わせる「クジラ石」と名付けられた岩もある。

「しろう森林王国」の「いちのみやミニ王国」の拠点として合宿や林間学校が行える宿泊施設が建てられている。電気は谷川のミニ水力発電所でまかっていたが、昨年8月の豪雨で破損し、トイレの浄化槽が動かなくなっている。